

氏名・(本籍地)	きむ そんちよる 金 聖哲 (韓国)
博士の専攻分野の名称	博士 (文学)
学位記番号	甲第48号
学位授与の日付	平成27年3月14日
学位授与の要件	麗澤大学学位規則第5条第1項該当 (課程博士)
学位論文題目	近代西欧文明に対する日韓の思想的対応 — 廣池千九郎と沈大允の道德思想を中心に —
論文審査委員	主査 中山 理 教授 副査 石塚 茂清 教授 副査 井出 元 教授 副査 洪 顕吉 (韓国) 嘉泉大学 名誉教授

## 内容の要旨

本研究は近代西欧文明に対する日韓両国の思想的対応の事例を廣池千九郎（1866～1938年）と沈大允（シムデユン 1806～1872年）の道德思想を中心に考察したものである。

本論文は全体的枠組として序論、本論、結論より構成されている。

序論は、1「研究背景・目的」、2「先行研究」、3「研究方法と内容」という三部構成である。1では、西洋主導の文明化が東アジアにもたらした思想的危機に対し、日韓両国がどのように対応したかというテーマを設定し、その挑戦を受けながらも東アジアの伝統的価値観を見失うことなく、新しい道德思想を提唱し、それに対応しようとした思想家が両国に存在したことの意義が語られている。2の先行研究では、近代西欧文明に対する日韓両国の思想的対応として、廣池千九郎と沈大允それぞれの道德思想とその学問的意義を検討し、両者の思想の現在の意味を考察しようとした先行研究が取り上げられている。日本では廣池に関する比較研究、韓国では沈に関する比較研究が別個に概観されているが、前者の場合は、廣池の道德思想の普遍性や科学性に注目した諸研究があり、また後者の場合は、沈の道德思想の現実的側面に焦点をあてた諸研究がある。また本研究と関連する先行理論として、「文明」と「道德」の意味をより明確化するため、「文化」と「倫理」も併せて考察している。このように「文明」と「道德」とが、どのような相関関係にあるかを概観することと併せて、本研究に関連する先行研究の流れが簡潔に整理されている。

3の研究方法と内容では、本研究のテーマを比較文明論的に研究するため、つぎの二つの視点を設定している。一つは、西欧文明の挑戦に対する日本文明と朝鮮文明の応戦という視点であり、もう一つは西欧思想に対する日本の廣池と朝鮮の沈の各々の道德思想による対応という視点である。具体的

内容としては 16 世紀以来、西欧文明の影響下にあった日本文明と朝鮮文明が比較検討され、この三文明の影響関係と特質について考察されている。次に、比較道徳思想の視点から、近代西欧文明に対する両国の具体的対応の一例として、日本の廣池の確立した「最高道徳」の思想と、朝鮮の沈が唱道した「與人同利」の思想が取り上げられている。

上記の序論をもとにした本論は、1「近代西洋文明に対する日本文明と朝鮮文明」、2「廣池千九郎における最高道徳の思想」、3「沈大允における與人同利思想」の三部より構成されている。1の「近代西欧文明に対する日本文明と朝鮮文明」では、19 世紀以後に近代西欧文明が非西欧文明圏で中心文明としての位置を獲得するようになった過程が、ルネサンス、宗教改革そして科学革命を中心に概観されている。その上で、近代西欧文明の衝撃を受け、周辺文明へと押しやられた日韓両国を取り上げ、西欧化に成功した日本と、それに失敗して植民地となった朝鮮が、宗教、科学、思想などの観点から、それぞれ近代西欧文明といかに対応したのかに焦点を当て、近代西欧文明、日本文明、朝鮮文明の三文明の特質と問題点も併せて比較考察されている。

2の「廣池千九郎における最高道徳の思想」では、まず廣池の生涯を通じて、その道徳思想の形成過程が概観されている。次にそれまでの道徳理論を集大成したといえる新科学、「モラロジー」の思想の本質を明らかにするため、「モラロジー」設立の学問的動機、この新学術用語の定義などをはじめ、「モラロジー」における道徳思想の構造や内容が論じられている。最後に廣池の提唱する「最高道徳」の本質を明らかにするために、廣池の世界観の分析を通して浮かび上がる自然観、人間観、道徳観、神観などにも注目しながら、実践的道徳としての「最高道徳」の構造と内容が考察されている。

3の「沈大允における與人同利の思想」では、廣池と同じように、沈の生涯を通じてその儒教思想の形成過程が概観され、次にそれまでの朝鮮における儒教思想を集大成した「福利」の思想的本質を明らかにするために、その学問的動機、意味、概略、および「福利」思想における道徳思想の構造や内容が明らかにされている。最後に沈の「與人同利」思想の本質に光をあてるために、沈の世界観、すなわち自然観、人間観、道徳観、神観などにも注目しながら、大衆の啓蒙思想としての「與人同利」の構造と内容が考察されている。

最後の結論では、1「近代西洋文明に対する日本文明と朝鮮文明」と2「近代西欧文明に対する日韓の思想的対応」の総括をもって本論を締めくくっている。

## 論文審査結果の要旨

本研究の基礎をなす論証は、つぎの2点である。

本研究では、まず、比較文明論的観点から、19 世紀以後の近代西欧文明が非西欧文明圏で「中心文明」としての位置を獲得するようになったのは、人間中心的思想を基盤にした科学革命の結果であるということを前提にしている。その上で、当時「周辺文明」であった日韓両国の西欧文明に対する対応を比較し、各々の文明的・文化的対応の成否および結果の相違を浮き彫りにしようとする。その上で、近代西欧文明に対して日本の着実な対応を可能にした一因を、同国が西欧文明を精神的な面と物質的な面とに分別して受容したことに求めている。その一方で、日本は、外来文明を積極的に受容し、日本文明を物質的に発展させることができたものの、その代償として伝統的な精神価値の喪失を招き、帝国主義に便乗する道を選択するに至ったと指摘する。これに対し、近代西欧文明に対して朝鮮がその対応を誤った原因として、西欧文明の宗教と科学とを分離できず、両者を未分化のままの状

態で捉え、排斥しようとしたこと、そして他文明である西洋列強と自律的に交流しなかったことなどを挙げている。このような朝鮮の傾向は、道徳優越主義の基盤を形成する要因となり、外国勢力の侵略に対抗する同国の原動力にはなったものの、その反面、現実的側面を軽視する傾向を生じたため、朝鮮が植民地化されるに至った主要な原因であると指摘する。

本研究では、近代西欧文明に対する思想的対応として、その道徳的側面に注目し、日韓を代表する道徳思想家として日本の廣池千九郎と朝鮮の沈大允を取り上げ、両者の道徳思想の比較分析が試みられている。まず廣池は、現代文明の危機の原因が、西洋における人間中心的思想にあることを喝破し、この状況に対する思想的対応として「モラロジー」という新しい科学的な道徳の思想体系を創設した。その中核を形成するのが「最高道徳」という世界諸聖人の実行した道徳であり、その実体を宇宙自然の範疇の中で、万物を生成化育する慈悲心の中に求めた。その道徳実行の効果を科学的に証明することで、道徳の権威を立て直し、これまでの人間中心の文明の限界を乗り越え、人類が謙虚に相互扶助的、宇宙的共栄関係を維持しながらその永続性を追求することの必要性を説いたところに、廣池の思想的意義を認めている。これに対し、朝鮮の沈大允も、文明の危機を人間の道徳的問題として捉え、その思想的対応として「福利」という独自の儒教的思想を提唱し、この「與人同利」思想によって、人間は実生活で発生しやすい争利を避けて利益と幸福を図るべきだと主張した。もちろん、道徳の科学研究への道を開いた廣池と儒教的道徳を再構築しようとした沈の間には相違点も数多く見受けられるが、この両者の道徳思想は、圧倒的な西欧文明の挑戦を受けながらも、東アジアの伝統的価値観を見失わず、新しい文明的地平を見出そうとした啓蒙活動として捉えられるとした点、そしてこれまでの欧米中心の文明史観とグローバル時代における自己中心性の問題点を、日韓の道徳思想の比較文明・文化的観点から再提起した点は評価できる。

論文審査では、以下のような意見が出された。

- ・本論文は、廣池と沈の思想研究のみならず、両者の活動の背景にある時代の歴史事象にも目配りが行き届いている。
- ・道徳思想の位置づけに関して、日韓の史的背景のみならず、両国に大きな影響を及ぼした欧州各国の史的考察も対象にしている。
- ・先行研究の一環として、専門用語の語源に遡った検討を加えており、正統な研究姿勢と言える。
- ・廣池千九郎研究についての資料が最も充実している麗澤大学大学院で研究しており、その成果が表れているとは言えるが、さらに歴史的な背景を考慮し、思想の形成の背後にある人間形成という視点に立った研究を深めることが望まれる。
- ・副査の洪頭吉博士からは、韓国では最近になって沈大允に関する研究が始められているが、道徳思想の側面から考察されたものは、本論文が最初であり、間違いなくよく纏められている、さらに渉猟されている韓国語の諸文献についても、ハングルの日本語訳は適切になされているとのコメントがあった。

その上で、さらに以下のような修正すべき点が指摘された。

- ・最終審査会での発表レジュメにある内容で、本論に含まれていない点（特に、図解の箇所）に関しては本論に追加したほうがよい。
- ・予備論文の段階で指摘された事項について、不完全な日本語表現も含めて、丁寧に説明を加えた点が多々あり、改善の跡が認められるものの、「論文要旨」および論文には、依然として日本語の表現として不適切な箇所が見受けられるので、適切な修正を加えると同時に、一般の辞書に掲載され

ていない「新造語」には注を加える必要がある。

以上のような指摘がなされたものの、それらは本論の論理的妥当性を否定するものではないと判断される。筆者も先行研究の分析で明らかにしているように、これまで廣池と沈に関しては、両者を個別に扱ったものしかなく、前者の場合は、経済家、教育家、思想家としての側面を、後者は儒学者としての側面をそれぞれ対象とした研究が主流を占めていたが、近代西洋思想の挑戦に対する東アジアの対応という視点から、両者を同じ比較文化・文明的地平で論じたものは、これまでのところ、本論とは別に筆者自身が公にした論文を除いては、発表されていない。また韓国と日本に焦点をあて、東アジアの近代化を西洋との関係において俯瞰する場合、経済、政治、科学思想などの観点から同テーマを論じたものは散見できるが、廣池の確立した「モラロジー」および「最高道徳」の思想と沈の提唱した「與人同利」思想との比較研究という、道徳思想に特化した視点からの研究は前例がないことから、本研究の先駆的独創性を評価して合格とした。